

# みやき街道交流会

「設立 10 周年記念交流大会 in 寒風沢」

## 報告書



平成 28 年 6 月

みやぎ街道交流会は、自然、歴史・文化などの地域資源を生かした地域づくりを旨として、平成19年5月3日に浦戸諸島(野々島・寒風沢島)で設立し、10年目を迎えます。今回、江戸時代に港として栄えた寒風沢島をテーマに記念大会を開催しました。

## プログラム & 目次

### 1日目(6月18日)

#### I. 交流会 (14:20~17:00)

会場/マリンゲート塩釜(3F)「マリンホール」(塩竈市営汽船ターミナル)

- (1) 会長あいさつ 1P
- (2) 活動報告「みやぎ街道交流会 10年のあゆみ」 2P
- (3) 記念講演会 (15:00~17:10)
  - 1) 「近世~近代の太平洋海運と寒風沢・石濱」 5P  
講師: 斎藤 善之氏 (東北学院大学教授)
  - 2) 「若宮丸のロシア漂流と寒風沢出身の津太夫・佐平」 8P  
講師: 平川 新氏  
(宮城学院女子大学学長・東北大学名誉教授)

※マリンゲート塩釜から寒風沢島へ移動(18:00~18:46)



#### II. 街道談義 (19:30~)

・寒風沢島・漁民センターで実施



(宿泊)/民宿「外川屋」

13P

### 2日目(6月19日)

#### III. 寒風沢島探訪会 (9:00~12:00)

「NPO みなとしほがま」の案内により、島内を探訪

※寒風沢島からマリンゲート塩釜へ(12:18~13:04) 解散

#### ➤その他

- ☞ 1日目会場にて「みやぎ街道交流会 10年のあゆみ」パネル展示
- ☞ 2日目午後、希望者に塩竈まちかど博物館「旧ゑびや旅館」を案内

[表紙写真] 野々島の渡船から寒風沢島岸壁を望む(H19.5.3撮影)

※3.11 大津波で壊滅的な被害を受け、この家並みは思い出の写真となりました。

[裏表紙写真] 日和山から旧船着場を望む。(左:被災前、右:現在)

## 会長あいさつ



「みやぎ街道交流会設立 10 周年記念交流大会 in 寒風沢」の開会にあたり、一言挨拶申し上げます。

平成 19 年 5 月に松島湾の寒風沢で誕生したみやぎ街道交流会は、今年 10 年目を迎えました。その「あゆみ」については、このあと事務局から詳しい活動報告をさせていただきます。

当会のウェブページにも掲げてありますが、みやぎ街道交流会は「宮城にある豊かな自然、歴史、文化、風土などの地域資源を、街道や舟運といった切り口から捉えなおし、地域と地域を結ぶことで交流と連携を促進し、心豊かで誇りある宮城の地域づくりに貢献する」ことを目的に活動を行っている団体です。

活動にあたって、私は日頃から「知る」、「調べる」、「伝える」を大切ではないかと思っております。

「知る」ことは「学ぶ」ことであり、曖昧な知識ではなく、学問に裏付けられた事実にもとづいて地域や地域資源を捉えることが必要ではないかと思えます。

「調べる」ことは私たちの場合「歩く」ことであり、知ったことを現地に赴いて実際に確かめる必要があります。「伝える」ことは「繋ぐ」ことであり、地域の方々との情報を共有しながら、地域と世代を超えて広げていきたいものです。

そしてこの何れにも欠かすことのできないのが街道談義であります。学んだ後の街道談義は知識をさらに深め、街道や遺跡を歩いた後の街道談義は格別です。また、地域の方々との街道談義は知識を広め、人心を強く結びつけます。

初代会長である高倉淳先生は、この「知る」、「調べる」、「伝える」自ら積極的に実践されました。10 年目という節目にあたり、私たちも高倉会長の意志をしっかりと確認しながら、この会をさらに発展させ、地域の方々との交流・連携して、歴史や伝統文化などの魅力を探り、今に活かし、後世に伝えていきたいと思えます。

本日の交流大会では、この会の顧問として日頃らご指導いただいております平川新先生と、斎藤善之先生に記念講演をいただきます。いずれも海運に関する内容のご講演で、両先生の日頃の研究成果を「知る」またとない機会であり、期待に胸が膨らみます。

それでは、ご多用のなか講演をお引き受けいただきました平川先生、斎藤先生に感謝申し上げます挨拶とさせていただきます。

平成 28 年 6 月 18 日

みやぎ街道交流会  
会長 白鳥 良一

# 活動報告「みやぎ街道交流会 10年のあゆみ」

## 【設立】

平成 19 年 5 月 3 日、宮城県内をはじめ東北各地の地域づくりなどの関係者約 30 名が塩竈市浦戸諸島（野々島・寒風沢島）に集い開催した「街道と舟運について高倉先生と語る会」において、当会を設立

## 【目的】

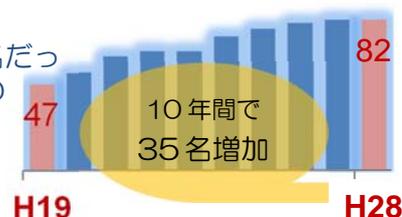
宮城県の豊かな自然、歴史、文化・風土などの地域資源を街道や舟運で結ぶことにより交流・連携を促進し、心豊かで誇りあるみやぎの地域づくりに貢献することを目的に活動中

## 【主な事業】

- (1) 交流連携に関する事項
- (2) 歴史資源の保存・継承に関する事項
- (3) 情報発信に関する事項
- (4) 活動支援に関する事項

### 会員数の変化

設立年度末 47 名だった会員数は、この 10 年間で 35 名増加し 80 名を超える団体となりました。



## 10年のあゆみ

	H19年度	H20年度	H21年度	H22年度	H23年度
主なイベントの開催 (共催含む)	第1回 交流大会 in栗原	とうほく 街道会議 第4回 交流会 仙台宮城 大会	交流会 in越河 ・斎川	第2回 交流大会 in加美	奥鹽 地名集 講演会 & 観月舟
調査 保存		大衡村奥田の旧奥州街道調査		上街道調査	
		栗原市～一関市奥州街道調査 刈払い			
総会 記念 講演会	街道と 舟運を 高倉先生 と語る会 in寒風沢	地域 遺産の 風致構成	関山 街道の 魅力	伊達 政宗の 領国整備 と街道	貞親 津波と 街道
勉強会 ミニ講座		・大衡村の 旧奥州 街道 ・地名学の タベ	・炭焼藤太 を語る ～伝説に どこまで 迫れるか～		
情報 発信	交流会 ニュース 創刊	交流会ニュース 年3～4回のペースで発行			
		HP開設 とうほく街道会議と協働HP運営			
	イベント情報の発信(主にEメールで年間平均47回)				
活動 支援	くりはら 街道 会議 H20.2設立	戊辰戦争 140年 in七ヶ宿 共催	すみた 街道 倶楽部 H22.2設立	栗原市奥州街道 マップ作成支援	



写真で振り返る

# みやぎ街道交流会 10年のあゆみ

H20



とうほく街道会議  
仙台・宮城大会  
基調鼎談の様子

H19

第1回交流大会 in 栗原  
高清水八重壁を歩く



H21

交流会 in 越河・斎川



H22

第2回交流大会 in 加美



H24

多賀城碑のなぞを探る  
表彰式の様子



H26

とうほく街道会議  
関山街道フォーラム



土の道探訪会より  
定義如来・貞能堂

H27

『おくの細道』多賀  
城・塩竈・松島紀行  
と観月灯籠流し



船上での会席・献杯

1日目…5月3日

12:30 「街道と舟運について高倉先生と語る会 in 寒風沢」開会



基調講演



活動報告(邊見氏)



会場の様子



活動報告(高橋氏)

16:00 野々島探訪出発



16:30 寒風沢島へ渡船



20:00 街道談義開始



## 写真で振り返る みやぎ街道交流会 発足の日

日程：

H19年5月3日～4日

参加者：

東北各地の街道仲間 32名、  
うち宿泊者 27名

2日目…5月4日

9:30 寒風沢島・島内調査



日和山、方角石、  
寒風沢明神社方面へ



寒風沢港は、東北の重要港湾として、海運史研究上全国的にも著名な港であり、江戸時代から明治時代の寒風沢がどういう港であったかについて、資料に基づき考えてみたいと思います。

### 1. 「寒風沢港殷賑(いんしん)時代の懐古」から

「寒風沢港殷賑時代の懐古」は、土井兼太郎氏が昭和30年に亡くなる5年前頃に執筆したもので、江戸時代後期まで遡った寒風沢の概要が詳しくわかる貴重な資料です。

※殷賑:活気があってにぎやかなこと。また、その様。

**土井兼太郎氏** 文久3年(1863)に寒風沢に生まれ、石巻の呉服商に奉公に出て、22歳で帰郷し、浦戸村の収入役、村会議員、助役、浦戸村村長四期などを務めた人物です。

**寒風沢港の創設** 昔、島の東側の鰐ヶ淵水道側にあった集落が、永禄年間(1558～1569)の津波により、寒風沢水道側に移転したとされます。その後、元和年中(1615～1624)に上総(千葉県)から長南和泉守が一族で来て、寒風沢を埋め立てたとの伝承です。東北の港湾地域開発に良くあるパターンの一つで、唐桑の鈴木家や綾里の千田家も同様です。長南家がこの地域の有力な家柄であることは、この地域のいろいろな調査でよく聞くので、ある程度信憑性を持ったものと感じています。

寒風沢水道は、水深があり、2つの島に挟まれ、冬場の北西の季節風の風除けになるため、帆船時代の停泊地として自然条件に恵まれています。なお、塩竈に近い石浜は、水深が深い、北西の季節風が吹き抜けるため、風の推進力を利用しない汽船の時代に活用されるようになったと考えます。

また、寒風沢は、石巻・野蒜・高城・塩竈・蒲生・閑上・荒浜といった仙台湾に面する主要な港湾の中間に位置しており、地理的な優位性があったと思います。

**東廻り航路の整備** 寛文年間(1661～1773)には、河村随賢により航路整備事業が行われ、幕府が荒浜と寒風沢に御城米蔵を建設し、天領米を運ぶための東北の重要港湾として公的に位置付けられます。

伊達信夫幕領の御城米や米沢藩領の藩米の輸送経路は、阿武隈川から荒浜に運びますが、荒浜は河口港で大型船の出入りが危険なため、中小型船で寒風沢に集積させ、大型船で江戸に出港する形となり、寒風沢が中心という位置付けが確定します。

**安永風土記・寒風沢浜(1770年代)** 家数138で、うち人頭118、水呑18、借家2、と水呑や借家がごく少ない。「**天当船**」という中型の比較的長距離の輸送を行う船が8艘あり、

うち4艘を長南清八郎が所有していました。

出入りした「**御城米船(ごじょうまいせん)**」は、7・800石から2000石です。2000石の船は、当時の最大級で、江戸や浦賀の船主の船が40～50艘あったとのこと。幕府の備船には、現在の日章旗の原型なる「日の丸船印」を掲げ、優先通行や一番良い場所に停泊するなどの特権がありました。

その他の船としては、仙台藩の米を輸送する「**御穀船(ごこくせん)**」が、大体100艘程度で、石巻市門脇の武山市郎右衛門など石巻の船主が多かったようです。

**港の施設など** 幕府米を保管する大きな「**御城米御蔵(ごじょうまいおくら)**」が3棟あり、蔵から船に積み込む業務を行う「**御蔵方(おくらがた)**」の役宅「**御蔵会所**」に幕臣旗本が御家人が下役を伴い交代で駐在したほか、江戸や大阪の大商人が「**廻船方御用達(かいせんかたごようたし)**」として駐在していました。疑問があるところですが、嘉永～安政(1848～1860)の御用達は、摂州灘の嘉納治郎作(講道館柔道創設者嘉納治五郎の出た家)で、灘の酒を運ぶ灘廻船の船主の一軒ですが、代理人を寒風沢に派遣していたと土井氏は指摘しています。

また、米穀検査や計量を行う「**大広庭**」や享保頃(1716～1736)に幕府が創建した立派な「**守倉(みくら) 稲荷**」の社殿がありました。棧橋は三本架設され、波浪の影響を避けるため、使用時のみ厚い板を張りつめて使うのだそうです。

仙台藩は、出入港船の検査や不正移出入品の取締り、運上金を徴収する「**御番所(ごばんしょ)**」(御穀改(おこくあらため)役所)を設置し、刺股などの捕物道具を役所前に掲げて示威していました。御番所は明治以降「**管船署**」と改称され、明治5年に廃止されるまで続きます。この御番所の運用マニュアルが後述する「**寒風沢御穀改所定**」です。

「**御城米浦役人(ごじょうまいうらやくにん)**」は、元禄(1688～1694)以後に設置され、御城米船の差配や海難事故の処理、取締りなどを行い、享保18年(1733)までは内海加兵衛が勤め、その後は明治維新まで長南清八郎(5～11代)が勤めました。寒風沢は、仙台藩と幕府の役所・役人が共に駐在する、少し特異な場所であったことが見えてきます。

「**廻船問屋(かいせんどんや)**」は、津方役所の公認のもと、寛文(1661～1673)頃から長南家が代々勤め、享保18年から「**御城米浦役人**」と兼帯し、御城米船のほか、御穀船、諸商船など出入りする全ての廻船の積荷を取り扱っていました。廻船問屋と御城米浦役人を長南家が勤めており、他地域とは少し性格が違う意味をもっているのかと思います。

「**廻船宿(かいせんやど)**」は、廻船問屋とは厳密には違い、「**廻船小宿(こやど)**」とも呼ばれる船員を泊める宿泊施設です。下級船員は停泊中、船内で寝泊りしますが、船頭や上級船員

は上陸し、小宿に泊まります。廻船宿は、船の乗組員の世話として、食料や飲み水、薪などの販売、航海中に船員が亡くなった場合の補充も行います。日本の船では、水葬は行わず、仲間の弔いと役人改めの証拠として、可能な限り遺体を塩で保存し持って帰り、停泊地のお寺に埋葬するのが基本的です。その際、小宿が取り仕切っていました。

年間の取扱入港船は200～300艘に及び土井家が享保18年から明治元年まで代々勤めました。

「**附船**(つけふね)」は、津方役所の公認を得て、入港廻船を小船で出迎え、水先案内のうえ曳航して碇泊させる船です。寒風沢の場合は、下級船員たちが酒食や宿泊するということで、船内の階層によって、廻船宿の附船が少し分離していた可能性を示しています。附船は伊豆屋(旧内海氏)がこれを勤めていました。明治の当主は伊豆与七です。

「**御升取**(おますとり)」は、御城米御蔵と廻船問屋に付属した米穀の計量する役職で、役得が多いといっています。明治前後は加藤茂八郎が勤め、太田氏と改名し回漕業に転じ、明治11年に戸長となっています。

**寒風沢の諸船**として、弁才船型では非常に小型の150～300石積の「小廻船(こまわしぶね)」があり、北上川、阿武隈川、鳴瀬川にも入るが、中心は荒浜、野蒜、石巻と寒風沢を結ぶ近距離航路です。大型のものは銚子、那珂湊、平潟方面の中距離航路にも就航していたようです。

「御穀船(ごこくせん)」は、仙台藩の藩米船で、船型は「弁才型」です。江戸へ藩米を積み、帰りには、江戸下り荷といって、江戸で買い付けた呉服、太物、古着、綿花、酒、陶器、雑貨などを運んできたと土井氏は書いています。

民間の商船は、「弁才型」で、千石級(「親船」ともいう)です。「北前船」(松前産物)、遠州の船(東北の木材)、尾張・伊勢の船(瀬戸内海産の食塩)、紀州の樽船(灘の酒)があり、最も多いのが江戸前船で、親船の付属艇である伝馬船もありました。

土井氏は昔の記憶を含めて、寒風沢港の在りし日の姿を書いており、昭和30年頃に書かれたのですが、記録としては幕末から明治のものとして、差支えないと考えられます。

## 2. 「寒風沢御穀改所定」について

土井氏の記録を裏付ける資料として「寒風沢御穀改所定」の文書があり、仙台藩が置いた寒風沢港の御穀改所の運用マニュアルです。

この定は元禄3年(1690)につくられ、様々な形で書き写された一つとして、文政8年(1825)に書き留められたもので、全60条あります。



「寒風沢御穀改所定」(塩竈市立図書館蔵)

第1条は**御留物の他領移出禁止**で、移出入に制限がある米や大豆、雑穀などを「御留物(おとめもの)」と言い、仙台藩の領外に出す際に、厳しい検査や所定の手続きが必要ということです。第2条は抜け荷の密告を推奨しています。

**海難・事故処理**に関し、第5条で難破船の対応として、普段荷揚げに使う引船を救助船として、速やかに出すことを規定しています。第7条から11条では津奉行衆の管轄を定めており、第8条に宮城新湊(蒲生カ)から定川までが寒風沢の御石役人衆の管轄と書いてあります。その他、**五穀船の破損と集荷の投棄、出入港の規定、船と積荷の証明、出入港検査と糧米規定、五十集・鉄銅・藍・紅花・麻苧の流通規制**などがあり、御穀改所が藩内の流通統制・監視していたことがわかります。

この様に厳しく規制しながら、藩に税金を出して移出入する場合は個別に対処する仕組みを作り上げていました。実は、この厳格な仕組みが、仙台藩の流通を近世後期になっても発展させていかなない制約の一つになっていると考えています。

奥付の日付が貞享特令の元禄緩和令の日付と同日であるため、領内流通機構が完成し、御石改所による流通の監視体制が確立したことを示すものが、この「定」ではないかと考えています。

寒風沢港の位置は、荒浜・石巻・小淵の相互間の中で、仙台藩の全体的な流通ネットワークを動かしていく重要なキーの1つになっていることが言えると思います。

この「定」は、きわめて体系的・網羅的な法規定であり、御穀改所による仙台流通統制の全貌に迫るものではないかと思えます。

## 3. 仙台藩の流通統制

「寒風沢御穀改所定」について、民間の資料で裏付けるため、塩竈の丹野六右衛門家が旧蔵していた五十集商人として覚えておくべきマニュアルのような「五十集必用」(文化8年(1811)2月)で確認します。

**領内向けの塩魚・干魚**でも、願書を提出し許可を受け、出帆後50日以内に帰り、願書を返却しなければ「過料」となっています。50日は、塩竈から、領内であれば行って帰ってこられる日数でそれ以上掛かるのは怪しいということのようです。

また、仙台肴町で売却場合は、仕切状(売買証書)を保管して置くようにということです。

**相馬領への海産物移出**は厳しく禁止されており、**南部方面から来た荷物**も、一旦領内に入ったものは、原釜相馬方面への再移出が禁止されています。この規定は、天和年中(1681～1684)からで、海上輸送は厳禁ですが、陸上輸送では、買付金の10分1を払えば認めるとのことです。

**江戸方面への移出**は、「仲御役(すあいおやく)」(移出税)を払えば承認する。「**密石**(みつこく)」した場合、米穀雑穀、清酒では重き御咄と奴にする。奴というのは奴隷で、商人であ

つても、仙台藩の役人か家臣の家に奉公に行かせるもので、非常に厳しい流通統制です。

**為登**(のぼせ) **荷物の指出願書**では、なぜか、「中湊(那珂湊)」へは為登荷物が可能(雛形として中湊の例が出されている)であることは、考えていく必要がある重要問題です。江戸方面に全く移出しないのは、藩財政自体が成り立たなくなるので、江戸方面はコントロール下で移出は可能ですが、原釜方面は絶対駄目だという、仙台藩の独特な規定があるということになります。

#### 4. 桂島石浜の白石廣造(しらいしこうぞう)の事績 (忘れられた塩竈人)

寒風沢港の江戸時代から幕末にかけての動きを見てきましたが、近代に入ってからを見たいと思います。

近代に入り、寒風沢の機能が移行する石浜の中心人物は白石廣造であり、子孫の白石晋一が書いた『明治の思い出—白石廣造翁の足跡—』(第一集 1987年7月刊)があります。

廣造は、弘化元年(1844)に武州北葛飾郡幸手(埼玉県)に生まれ、幼くして父母を亡くし、18歳の時に横浜に出て、新しい西洋知識を得て、27歳(明治3年)の時、廻送会社を設立します。



白石廣造の肖像(63才)

翌年には汽船の船長として、白石・角田・岩出山の旧藩士を北海道開拓移民として移送し、12月に石浜に来て、村民と協議のうえ、ここを拠点とした回漕業を始めました。その後、華々しく活動し、大正2年に70歳で亡くなった後、昭和2年、白石汽船の北星丸が石炭を満載し、小樽を出航、瀬棚沖(北海道)で遭難し、乗組員21人と船が失われ、翌年に白石汽船株式会社は解散します。



#### 白石商店の紹介

**白石商店**は、商店部・遠洋漁業部・運輸部倉庫・船舶部・運送部・艇下部等で構成され、石浜港に白石商会(本店)、塩釜港に白石商店・同運輸部・同運送部・同塩竈倉庫(株)、仙台停車場前に白石運送店・同商会倉庫部が置かれます。業務は商業、遠洋漁業、回漕業、鉄道貨物運送取扱業、保険会社代理店、倉庫保管業、艇下運搬業等で、塩竈の荷役の重要な役割を担っていました。

更に発展的に**ラッコ船事業**を明治26年頃から始め、当初の金華山沖・日本海から最終的にはアラスカまで行きますが、明



ジュノーの裁判所での開盛丸の一同

治42年、アメリカに拿捕され、ジュノーで裁判を受け、船は没収、乗組員は日本へ送還されます。明治44年、国際的にラッコの捕獲が禁止され、事業

は終息します。

若宮丸の船員たちの次の世代の寒風沢・石浜の漁民たちも世界へ乗り出し、勇壮な漁業活動を展開し、近代日本の北洋漁



明治40年ごろ 釜石港のラッコ船

場開拓の魁となっているので、塩竈の歴史として、もう少し掘り起こす必要があると思います。

白石商店は、**石浜開発以外**に、二口越街道の開削事業や仙台電力会社の社長就任、養蚕、米の品種改良、鰹節やマグロ節改良やカキ繁殖なども手掛け、塩竈港の近代化に尽力します。白石家の家訓と白石商会の守則には、彼が商業の現場でたたき上げた叡智が見られます。

#### さいごに

今日は、寒風沢がこの地域の流通の結節点として、どの様な所だったのかを中心に報告しました。今後は、もっと研究を積み重ねていく必要があります、重要な資料もありますので、丹念に見ていきたいと思っています。

#### 【講師プロフィール】

1958年栃木県生まれ。1981年宇都宮大学教育学部卒業。1987年早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程終了。

日本福祉大学知多半島総合研究所嘱託研究員などを経て。現在、東北学院大学経営学部教授。

専門/日本近世史、海運港湾史。

著書/『内海船と幕藩制市場の解体』(柏書房 ポテンティア叢書、1994年)などの外、

講演内容に関連して、『海の道、川の道』(山川出版社 日本史リブレット、2003年)などがあり、江戸時代の回船研究の第一人者で、東北学院大学に着任以来、奥州地域の海運調査も進めています。

▶NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク 副理事長。

▶NPO 法人 NPO みなとしほがま 古文書部会長。

▶みやぎ街道交流会顧問として、これまで「奥鹽地名集」や「川みちの歴史」に関する講演をお願いしました。

※1) 写真・図は、講演配布資料からの抜粋です。

※2) 要旨は、事務局責任編集です。



随分とお世話になった高倉先生とその仲間達が創立した「みやぎ街道交流会」も10年目を迎え、この様な形で恩返しができる事を大変光栄に思います。今日のタイトルは、発足の地・寒風沢に焦点を当ててほしいと事務局の指定になっています。

### 無数にあった漂流

私が『開国への道』(小学館、2008年)を書いた時には、全国の資料館・図書館等に多くの漂流記が所蔵されており、漂流先が判明したものを整理すると約500件の漂流事件があり、漂流記は1万冊近くありました。

この500件は生還して書かれたものです。実際には、この数10倍から100倍の漂流事件が起きたかもしれず、1つの船に10数人から30人乗っていますから、犠牲者は数万人から20万人くらいかもしれません。

漂流先として、近くは八丈島・小笠原、北方ではカムチャツカ半島、アリューシャン列島、千島列島、樺太、南では琉球、台湾、ベトナムで、アメリカ大陸もあります。漂流先が書かれた『江戸漂流記総集』によると太平洋一円となっています。

### 若宮丸のロシア漂流

若宮丸は、寛政5年(1793)11月に石巻から(寒風沢ではなく)東名浜を経由して江戸に向かう途中、塩屋崎付近(いわき市)で暴風雨に遭い漂流を始めました。帆柱を折られ、舵を失い風任せ・潮任せの状態になりました。半年間漂流した翌年の5月、アリューシャン列島の小島に漂着しましたが、その島がどこかは確定しがたいところです。



【図1】遭難絵馬(参考)

船は米や海産物を積んでいますが、若宮丸の場合は材木も積んでいたと漂流記(後述)に書かれています。この米や海産物で食いつなぎますが、野菜は積んでおらず、脚気になり、痛みに襲われています。

遭難事件では、病気や海に落ちたりして亡くなっている場合がありますが、若宮丸の乗組員は16名で、アリューシャンの小島に漂着するまで全員無事でした。乗組員の出身地は、室浜(2名)、寒風沢(津太夫・左兵衛など5名)、桂島石浜(1名)、

石巻(6名)、小竹浜(2名)です。廻船宿が集めた仙台湾岸一帯の人達が石巻の千石船に沢山乗り込んでいました。

若宮丸の船主は、石巻商人の『米沢屋』でした。この米沢屋のことも長い間分からなかったのですが、10年前位に北上町の資料調査を斎藤先生と行った時に、米沢屋の書類の一部が発見され、南三陸一帯で海産物の取引を行っていたことを根拠付ける資料が出てきました。

### 漂流民が見た北方世界

若宮丸の漂流民が10年後に戻って来た時、大槻玄沢ら学者たちが、彼らから聞き取りをし、若宮丸の漂流記『環海異聞』

(以下、『漂流記』)をまとめる際に一緒に書かれた当時の様子がイメージしやすい絵があります。



【図2】穴居・土室

アリューシャン列島に漂着した時に、助けられた地元の人達の住居は、穴居(けっきよ)・土室(つちむろ)です

【図2上】。土の中から頭を出していますが、他の文献【図2下】によると内部構造は、地下に洞穴を掘って、梯子で出入りします。非常に極寒の地のため、このように地下生活でした。『漂流記』を読むと、海産物がそのまま放置され大変に臭い等で、最初は耐えられないようでした。命を助けられ有難いことであるが、とても大変な状況であったことが『漂流記』に書かれています。

### ロシアの東方進出

ロシア自体は、ウラル山脈の西側にあった国ですが、1600年代にウラル山脈を越え、どんどんシベリアを征服して行きました。シベリアは多数の少数民族が居ましたが、ロシアはコザック隊を先兵として、圧倒的な軍事力でどんどん制圧して行きました。先住民は弓と矢が武器でありとてもかまいませんでした。数10年で、ウラル山脈を越えオホーツクまで到達し、1700年代にカムチャツカを支配下に置きました。

日本からの漂流民は、1600年代初めあたりから記録に出始めます。1700年代半ばまでは、千島列島やカムチャツカ半島あたりでロシアに保護されたものが大半でしたが、1700年代後半になると、アリューシャン列島で保護されたという事例が出

てきます。若宮丸より10年前にアリューシャンで保護されているものもあります。なぜ、この時期からアリューシャンで保護されているかというと、ロシアが1700年代に征服支配したためです。そして、毛皮を求めアリューシャン列島を島伝いに進出し、アラスカまで上陸しました。現在、アラスカはアメリカ領ですが、この時期はロシアの領地でした。

そこに日本人が漂着し、先住民が保護した後、ロシアの狩猟家たちが来て日本人を保護し、イルクーツクやペテルブルグに連れて行きました。日本人を保護する理由は、ロシアの対日本政策との絡みです。

ロシアは、1730年～1750年代の頃、カムチャツカを拠点に東へ東へと行く一方で、千島列島沿いに南下し日本に近づいて行きました。そのころから、日本側では、ロシアが南下を始めたことを知り、日本としてどのように国防体制を整えるかが重要な課題となってきます。

なお、アラスカは、ロシア人が毛皮を取りつくし価値がなくなり、1800年代半ばに二束三文でアメリカに売りました。今、アラスカは重要な地下資源の宝庫で、ロシアは後悔しています。

### 漂流民 イルクーツクへ移動



【図3】氷海をオホーツクに向かう

漂流民がアリューシャンからロシア船に乗せられオホーツクに向う『漂流記』の絵ですが、氷山の合間を行き、航海も大変危険なものでした。オホーツクからイルクーツクへは、馬車や犬ゾリで移動し、凍った川もソリで渡りました。



【図4】イルクーツクの町並み

【図4】は、私が14・5年前に漂流民を追いイルクーツクへ調査に行った時の街並みの写真です。表通りはレンガ造で“シベリアのパリ”といわれる非常に美しい街ですが、裏に入ると木造の建物が軒を並べています。当時は沢山あった木造の建物が、今ではかなり少なくなったと聞きました。これらのレンガ造りや木造の建物も若宮丸漂流民たちが訪れた時にもあったと思われます。実際、若宮丸漂流民達が住んだのは、木造であらうと思われます。

16人いた若宮丸漂流民のうち、石巻出身の平兵衛は1794年漂着して間もなくアリューシャンで死亡、同じ出身の市五郎

はオホーツクから移動途中のヤクーツクで死亡、小竹浜出身の吉郎次はイルクーツクに着いてから死亡、と3名が命を落としています。

イルクーツクで吉郎次のお墓を見たという明治政府高官が書いた記録があります。調査の時、地元の歴史家に可能性のある場所を教えていただき探しました。かつて墓地があった寺院等は、ロシア革命後破却され公園になっています。墓石が土の中にだいぶ埋まっていそうな状態になっており、このあたりに外人墓地があったのだらうなということまでわかりましたが、大調査団を組織しないと発見できないような状態となっていました。

残り13人は、ロシアに保護され、イルクーツクで生活していくこととなります。

ロシア政府が日本人の保護命令を出しており、狩猟を切り上げてでもイルクーツクまで連れていくと、莫大な褒美を貰えたようです。これはロシアの対日本政策で、日本に接近するため、漂流民から日本の情報を仕入れたいという事情があります。当時、日本は鎖国していますが、目と鼻の先の日本を毛皮市場として、直接交易をしたいと考えるようになるのは当然です。それからシベリアは、極寒の地であり野菜等が採れないので、日本から食料を仕入れたいという考えがあったようです。

そのため、日本の情報を漂流民から仕入れるのが一番良いと考えていたようです。それから、外交交渉のため日本語を翻訳できる人材が必要で、漂流民たちから日本語を教わり、翻訳を養成する日本語学校を作っています。

### 漂流民のイルクーツク生活

漂流民たちはイルクーツクで、住まいと毎月銅銭300枚の支給を受けましたが、これだけではきつい生活だったようで、日雇い稼ぎもやっていたことが『漂流記』に残っています。この様な中、ロシアの役人からロシア正教の洗礼を受けて、ロシアに帰化すれば待遇が良くなると誘われ、4名が洗礼を受けています。早く洗礼を受けた善六(石巻)と辰蔵(桂島石浜)は日本語教師にも取り立てられ、待遇が良くなりました。一方で、日本に帰るので絶対に洗礼を受けないという人たちと、早くロシアに帰化した人たちの間では、関係がやや悪くなっていたということも書かれています。

イルクーツクには、善六たちが洗礼を受けたと言われているロシア正教会が残っています。ロシアで日本語学校の教師を



【図5】日本語学校だった建物

していたのは、若宮丸の善六らだけではなく、それ以前の1696年に漂着した大坂の伝兵衛がペテルブルグで日本語学校教師になっているという記

録もあります。他に奥州のサニマ(三右衛門と推測)、薩摩のソーザとゴンザ他、数名がいるようです。

当時、日本語学校だった建物【写真5】が今も使われており、ロシアの国民学校・ギムナジウムの校舎の一室が日本語学校だったということです。最初の建物は、今の何分の1かの大きさだったようですが、当時の図面もロシアの図書館で見つめました。

佐兵衛(寒風沢)は、洗礼を受けず、いろいろな日雇い仕事をやっていたようで、バイカル湖で漁をしたということが絵とともに『漂流記』に記録されています。日本側の記録で、当時のロシアの民俗等がわかる貴重なものです。

そのころ日本では、若宮丸は難破しただろうと考えていて、船主が石巻の禅昌寺で7回忌を行っており、供養塔を建てました。この供養塔が発見されたのは平成元年で、境内の池の石橋の礎石に2つ折りで使われていました。参道工事中に発見され、若宮丸の供養碑だということがわかり、補修をして建て直したということです。なぜ供養碑が石橋に使われていたのかは謎です。多分、若宮丸の4人が帰ってきて生き延びていることがわかったので、7回忌の供養碑は必要ないと破却したのではないかと考えています。禅昌寺に行き、ぜひご覧いただきたい。

### 皇帝に謁見した10名の漂流民

イルクーツクの毛皮商人レザーノフが、商圏の拡大を狙い、日本の漂流民を日本に送還することによって、日本との貿易交渉を開始したいとロシア皇帝に提案しました。そして、13人は皇帝に拝謁するため、1803年にペテルブルグに向かいました。途中、清蔵(石巻)、佐太夫・銀三郎(寒風沢)の3人が、悪路の長い道中での車酔いや病気で脱落し、結局ペテルブルグに入ったのは10人でした。

皇帝に謁見をうけたペテルブルグの冬の宮殿や宿泊した商務大臣の屋敷が残っており、壮麗な建物です。また、彼らはロシア皇帝夫妻の油絵を購入したようです。この絵は残っていませんが、写しが『漂流記』にあります。当時の日本だと天皇や将軍の肖像画というのはあり得ないですが、ロシアでは皇帝の肖像画が町で売られており、持ち帰ってきたということです。

10人の漂流民のうち、室浜の儀兵衛・太一郎と寒風沢の津太夫・左兵衛の4人が日本への帰国を希望します。善六・初(八)三郎(石巻)、辰蔵(石浜)、民之助(寒風沢)は、当時日本では禁制だった洗礼を受けており帰国を断念したものです。茂次郎(小竹浜)、巳之助(石巻)は、残留を希望した理由はよくわかりませんが、後の記録によれば、ペテルブルグで洗礼を受けたとのこと。

洗礼を受けたとか、ロシア人女性と結婚をしたとか、また長い航海でとても日本に帰り着くまで体が持たないだろうとかの様々な事情で帰国を断念したようで、ペテルブルグで大きく漂流民の運命が変わっていったということになります。

### 日本への帰国

帰国を希望した4人は、ナジェージダ(希望)号という船に乗って、大西洋、サンタ・カタリナ付近(ブラジル)を南下して、アメリカ大陸の南端を回って、マルケサス諸島(現フランス領ポリネシアの一部)、ハワイ諸島に寄って、カムチャツカ半島のペトロパウロフスクに寄港したうえで、また日本列島沿いに南下して、鹿児島をまわって長崎に入りました。1803年6月にロシアを出港して、翌年9月に長崎到着したという、大変長い帰国の旅路でした。これで世界一周したことになります。



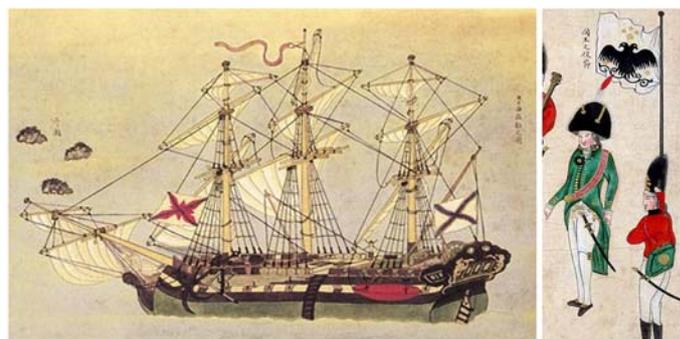
マルケサス島 サンドイッチ島

【図6】南洋島の男女

【図6】は、『漂流記』にあるマルケサス島、サンドイッチ島で見た人たちの絵です。島の男と女の刺青の違いについて、漂流民から聞いた話に対して、

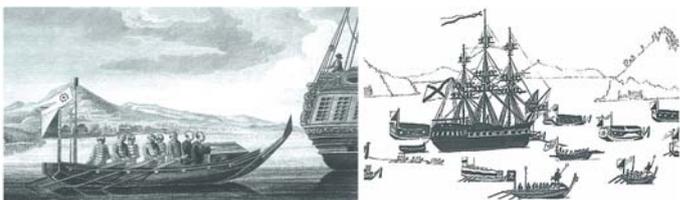
世界の民族の図柄などのヨーロッパから長崎経由で日本に入ってきている文献をみせながら描いたのだと思います。

各地での漂流民たちのいろんな見聞の情報というのは、日本の蘭学者にとって世界情報を知る非常に大事な要素になっていたということです。また、実際に文化人類学の研究者が、1800年前後の太平洋諸島の民族のあり方を見ていくときにきわめて正確な図柄になっています。



【図7】長崎入港のナジェージダ号・レザーノフ

【図7】が長崎に入ったナジェージダ号ですが、レザーノフが正装した姿も日本人の画家が描いています。そして、【図8】がナジェージダ号に乗っていたロシア側が描いた長崎奉行所の役人が小船に乗って接近をしてきている絵ですが、実際の文献の表現と絵が完璧に一致しています。



【図8】ナジェージダ号を臨検する奉行所役人・包围する警固船

長崎では、福岡藩や佐賀藩とかが手分けして海岸防備しており、この時担当の佐賀藩の『魯西亜渡来録』という記録を見ると、「異船見届けのため飛船差し出し～言語・文字など差し分ならず候えども、右異船へ日本人四人乗り込み罷りあり、右の者どもよりオロシア船に相違これなき段、申し出候」と、津太夫たち4人の日本人がいて、彼らに確認をして、これはロシア船だと書かれています。

漂流民は、ロシアに10年もいたので、当然ロシア語は話することができるわけで、最初はロシア船であると漂流民に確認したのですが、その後、長崎通詞はオランダ語が分かる船長と医者がいたので、オランダ語でやりとりをしたということになります。たぶんこれは、日本側の役人が、若宮丸の漂流民を介して通訳するということになると、役人自身が幕府に処罰される可能性があるわけで、そんな危険なことではできないということです。

「頭分の者は日本の言葉少し通じ候」ということですが、レザーノフは1年半に及ぶ船旅の中で、漂流民たちに日本語を教わっており、片言の日本語が話せたとありますが、主たる会話はオランダ語であったということです。

そして、ロシア人への質問を終えた後、漂流民4人に「その方ども何国の者に候や」と質問をすると、「仙台の者どもに御座候」と答えたということです。「漂流民ども服はオロシア着致し、髪もオロシア人同様惣髪、もつとも右四人のうち太十郎、日本服着用致しおり候、いずれも服は白木綿、縞木綿の類にて、オロシア言葉よく覚え居り候様子に相見え候」とあり、太十郎だけが日本服を着ており、ほかの3人はロシア服の装束を着ていたということです。

ペテルブルグには、ヨーロッパやアジアからもいろいろ物が入ってきており、その中に和服もあったということです。太十郎は和服にこだわった。そこに彼の気持ちが表れたと思います。

### 漂流民4人の引き渡し交渉

ところが、長崎奉行所から早く日本側に渡してくれと言われるのですが、レザーノフは、幕府役人との正式な交渉が始まるまでは渡せないと言います。つまり人質です。鎖国ですから、漂流民を渡せば、帰らなさいと言われるだけで、そこは条件を通すまでは渡せないとなるわけです。その間、漂流民やロシア特使は、ここから出てはならないと長崎の梅ヶ崎の宿舎に幽閉されます。

この様な中で、和服にこだわっていた太十郎が自殺未遂を起こすということになります。

10年前に大黒屋光太夫が、ロシアのラスクマンによって日本に送還され、牢屋に入れられたという情報を聞きました。同じように牢屋につながるのではないかとノイローゼになり、帰ってきたことを非常に後悔していたということです。

しかし、この情報は間違っていました。光太夫は、江戸の小石川薬草園に住居を与えられて、自由に暮らしていました。光太夫たちの海外知識を外に出さないための足止めが、幽閉さ

れているような誤情報になったのだと思います。むしろ幕府はこの海外知識というものを非常に重視していた表れだと解釈したほうが良いと思っています。

その誤情報もとで、太十郎はナイフで喉を突いて自殺を図り、一命を取り留めますけれども、喉を切っているから話せなくなります。

レザーノフは、太十郎の自殺未遂で、とても恐ろしくなります。またこんなことが起きたら大変だと、すぐ日本人を引き渡したいと言いますが、今度は長崎奉行所が引取りを拒否します。長崎奉行所は江戸とやり取りしており、レザーノフに対する方針が決まっていますから、引き取ることができないわけです。

結局、6ヶ月間、彼らはそのままになっていました。幕府は通交を拒否し、退去を命じ、その際にレザーノフは漂流民を引き渡して長崎を出て行くわけです。

### 長崎から江戸へ

4人は、長崎奉行所の「揚屋」に入れられてしまいますが、半年後の1805年10月に仙台藩士が引き取りに来ます。そして、同12月江戸で仙台藩主に謁見を許され、その時に蘭学者の



【図9】『環海異聞』

大槻玄沢らが事情聴取をし、『環海異聞』【図9】が作成されたわけです。玄沢の門下生も含めて、当時の江戸にはいろんな人がいましたから、様々な文献や情報を整理し、知識を集約したものとして、『漂流記』は出来上がっており、非常に質の高い海外情報誌になっています。玄沢はこれをきっかけに日本におけるロシア学の第一人者になっていくことになるわけです。そういう意味では、若宮丸の『漂流記』は、日本のロシア研究に非常に大きな貢献をしたという良いと思います。

そして、文化3年(1806)2月下旬に江戸を出発、石巻に戻って来ました。今年で帰郷210年です。【図10】は、帰国の際に

### 13年ぶりの帰郷

太十郎がロシア皇帝アレクサンドル1世から賜った羅紗の上着で、室浜の奥田さん宅に残されて



【図10】ロシア皇帝から賜った羅紗の上着

いました。大切なものと思わずに野良着にしていたということで、だいぶ傷んでいますが、奥松島縄文村歴史資料館に大事に保管されています。貴重な文化財だという良いと思います。

私が資料調査したロシア側の記録には、漂流民のことが「ツダイ(津太夫、各種資料から土井)、サフェイドイヤ(土井屋左兵衛)、タジュロオクダイ(奥田屋太十郎)、ギフェイオクダイ(奥

田屋儀兵衛」と表記されています。先ほどの斎藤先生の講演で、寒風沢は土井という苗字が多いと紹介がありましたが、まさにロシア側の記録にはこのように苗字が残されています。

多くの方は、江戸時代初期は苗字を名乗っていなかったと教わったと思いますが、そのようなことはありません。彼らは名前を聞かれた時に、土井屋左兵衛などの名乗り方をしています。苗字を持っているが許可なく名乗ってはいけませんというのが江戸時代であり、それが苗字を持たないと誤解をされてきたのではないかと思います。

彼らは仙台に戻ってきて、文化3年(1806)6月、津太夫は若宮丸船主米沢屋のもとに行きました。その時の記録も『陸奥仙台領石巻米沢屋船魯西亜漂流之事』という別の漂流記が残されています。「文化三年寅年二月帰国せし水主四人の内老人、寒風沢浜津太夫と申すもの、船主平之丞方へ見舞に来て夜語りたせしを聞書さしるすのみ」ということです。米沢屋にも何種類か漂流記が残されており、しゃべり方・書き記し方が変わっているでしょうし、情もあるものないものでそれぞれ多少違ってきています。

### 帰郷漂流民 その後

ロシアがどんどん南下し、北方が緊張していく中で、幕府若年寄の堀田正敦が文化4年(1807)7月、蝦夷地巡見をする際に2人を野辺地(青森県)に呼んでいます。「おとしの春、北のえみしよりおくりかへされし仙台の船子ふたり、かの国のさま、たづねることもあらんとてぐしたりしを呼び出て、夜更るまで何くれの物語するを聞きつ」ということです。更に、11日後、函館においても、2人と牛滝(下北)の漂流民も集めて聞いています。えみしの国とはロシアのことで、彼らのロシア体験情報は、幕府にとっても非常に貴重な情報となるわけです。

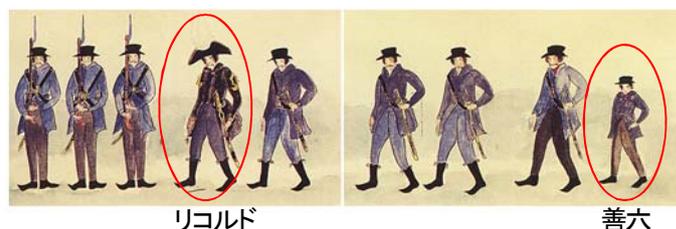
「ふたり」とは誰なのかですが、没年で見てみると、津太夫、左兵衛と考えられます。寒風沢の松林寺の過去帳【図 11】に「大覚浄知信士 文化十一戊七月 俗名津太夫」、「観相了念信士 文政十二丑四月 彦和田左平」と残されています。太一郎が文化3年4月没、儀兵衛は文化3年9月没で、過去帳も宮戸の観音寺に残されており、帰ってきた4人のその後を確認でき

ます。また、松林寺には、帰国していない寒風沢の3人の戒名があり、東名浦を出航した日を命日として弔っています。

### ロシアに残った漂流民

ロシアに残った9人の子孫が、当然ロシアにいるだろうと考えられるわけです。ロシアの研究所に資料探しを頼み、見つけたという情報でロシアに調査に行ってきました。そして、ロシアで漂流民の子孫と名乗る人と会った時は、これはビッグニュースだなと思い、帰ったら記者会見でもやろうと思ったのですが、その証言しかないので証明が得られない。シベリア抑留民の子孫は沢山いるわけで、それが本当に若宮丸の漂流民の子孫であると、確定はできないので、いまだに眠らせたままの情報となっています。

残された話として、今後どのように流れるか分かりませんが、ロシアに残った善六(石巻)がいます。1813年、ゴロニン救出の日露交渉で函館にリコルドと登場【図 12】しているというドラマチックな話も残っていますが、今日はここまでにしておきます。



【図 12】函館奉行に向かうリコルド達(函館図書館蔵)

### 【講師プロフィール】

1950年福岡県生まれ。1976年法政大学文学部卒業、1980年東北大学大学院文学研究科修士課程修了。1996年5月東北大学東北アジア研究センター教授。2005年～2007年同大学同センター長。2012年東北大学防災科学国際研究所初代所長。2014年宮城学院女子大学学長、東北大学名誉教授 現在に至る。

専門/日本近世政治経済史、歴史資料保全学。

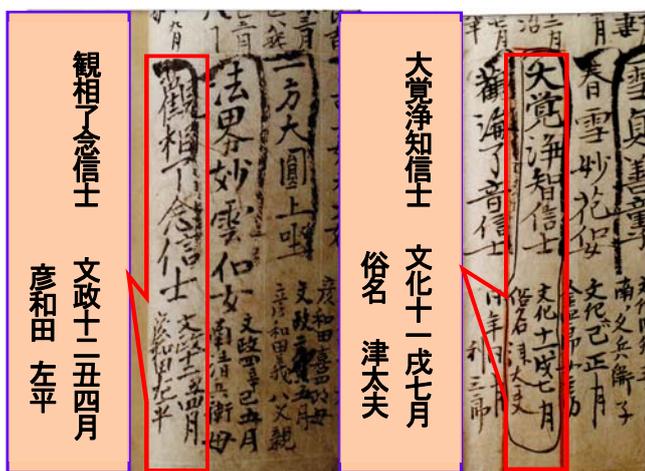
著書/『紛争と世論-近世民衆の政治参加』(東京大学出版会、1996年)、『近世日本の交通と地域経済』(清文堂出版、1997年)などの外、講演内容に関連して、『開国への道』(小学館、2008年)で、漂流民から新選組まで、幕末期を生きた人々を通して、鎖国から開国へ、そして「徳川の国」から近代国家へ向かおうとする社会の変貌を新たな視点から描いています。

▶NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク理事長。

▶みやぎ街道交流会顧問、関山街道フォーラム協議会会長を務め、度々講演をお願いしています。

※1)写真・図は、講演配布資料からの抜粋です。

※2)要旨は、事務局責任編集です。



【図 11】津太夫と左平の過去帳

# 「みやぎ街道交流会設立 10 周年記念交流大会 in 寒風沢」 写真ダイジェスト

I. 交流会 (平成 28 年 6 月 18 日 14:20~17:00) マリンゲート塩釜 3F「マリンホール」 [参加者] 63 名



受付風景(会場入口)

司会進行(馬場会計)

10年のあゆみパネル展示

10年のあゆみ(事務局長)

斎藤先生の講演

平川先生の講演

熱心に聴講する参加者

II. 海道談義 (18 日 19:30~21:30) 浦戸東部漁協漁民センター(寒風沢島) [参加者] 24 名(地元参加者含み)

交流会後、発足の地である寒風沢島も訪ねました。3.11 津波の壊滅的な被災から復興を進める途上です。



先ずは乾杯!

海鮮料理と持寄った地酒

松林寺住職外地元の 2 名も参加

更に民宿では遅くまで海道談義

III. 寒風沢島探訪会 (6 月 19 日 9:00~12:00) [参加者] 16 名(スタッフ含み)

発足の翌日(平成 19 年 5 月 4 日)とほぼ同じコースを巡り、3.11 津波の壊滅的な被災から復興を進める寒風沢島の状況も確認しました。

【コース】 民宿前発[9:00]~(200m)~開成丸造艦の碑、御城米御蔵跡・守倉稻荷跡~(300m)~日和山(しばり地藏・十二支方角石)~(500m)~砲台跡~(300m)~寒風沢神明社・水神~(浦戸米水田)~(1600m)~六地藏~(400m)~松林寺(化粧地藏・延命地藏)~(400m)~船発着所着[11:30] [計]約 4km  
 ※寒風沢島[12:18 発] ~マリンゲート塩竈[13:04 着] 解散



造艦の碑

御城米御蔵跡

日和山の十二支方角石

日和山のしばり地藏

途中の散策道

砲台跡

寒風沢明神社

チリ地震津波被災の地碑

浦戸米の水田

復興住宅

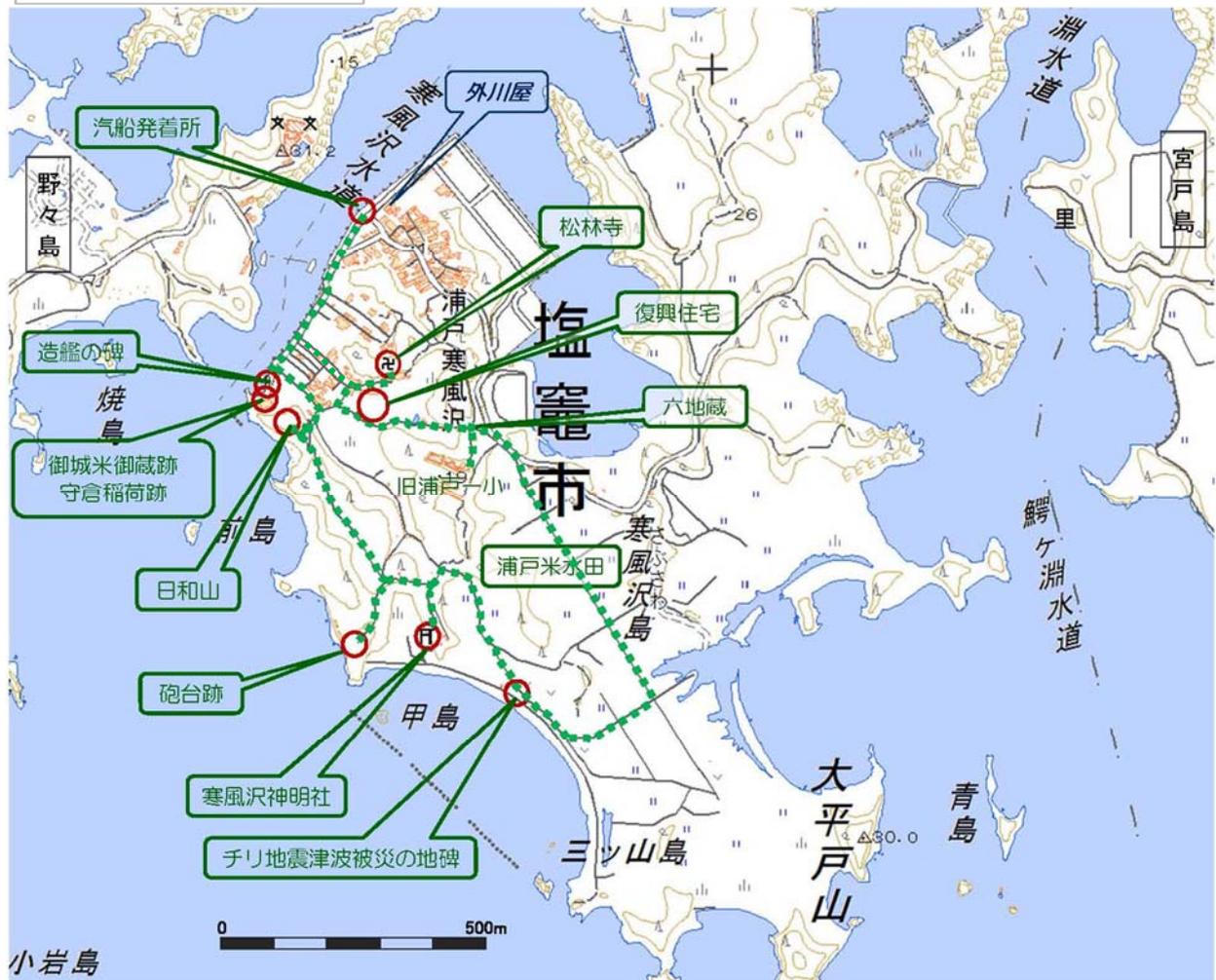
寒風沢の六地藏

松林寺の化粧地藏

【メモ】・寒風沢島の水田は、塩竈市唯一の水田だそうです(他には塩竈神社の御神田のみ)。この米で地酒の“寒風沢”も造られています。

・六地藏は、平川・白鳥両先生の石刻文字の解読で、天保の津波と飢饉の犠牲者供養のため、嘉永 2 年 建立されたものとのこと。

## 寒風沢島探訪マップ



### みやぎ街道交流会 事務局

〒980-0802 仙台市青葉区二日町 13-17

TEL 080-3322-1966 FAX 022-262-0379

Email miyagi.kaidou@gmail.com

URL <http://www.tohoku-kaido.com/miyagi/>